

# 成果報告書

記入日 2023年 5月 14日

フリガナ：( サイトウ シュンスケ ) 氏 名：斎藤 俊介	渡航先国名 タイ	留学先の所属機関：タマサートダ大学 帰国後の所属機関：東京都立大学大学院
研究テーマ：北部タイ平地社会の漸進的エスニック・ナショナリズムに関する社会人類学的研究		
研究期間： 2017年 1月～ 2018年 12月 ( 2年 0ヶ月)		
研究成果（概要） タイ北部チェンマイ県に位置するコン・ムアン（タイ北部平地諸集団）村落におけるフィールドワーク調査を実施。当初の研究計画から大幅に方針転換をした結果、「象」をエスニック・マーカーとして位置づけたうえ、エスニック集団間との相互関係から当該集団のエスニシティを明らかにする試みを行った。		
研究成果（詳細） コン・ムアン（タイ北部平地諸集団）はこれまで「実体がない」と形容される集団であった。東南アジア大陸部は、中国とインドという二大文化圏に挟まれ、さらに平地と山地という二元的な文化生態圏も併存する。それゆえに当該地域における民族間の交錯は、常に複雑な様相を呈してきた。コン・ムアンは、平地と山地が交差するフロンティア、タイ北部におけるマジョリティ集団である。タイ研究分野におけるコン・ムアンは、「根底には民族間の『混濁』が事実としてある」と指摘され、民族的／地理的区分にまつわる明確な共通認識を持たない、流動的なカテゴリーとされてきた。 そこで私は、コン・ムアンのエスニシティを、生活世界に密着する信仰や親族組織といった伝統的な秩序規範から理解することをゴールとして設定し、本研究を開始した。 当初の計画ではこの研究目的を達成するため、エスニシティ研究とタイ北部平地社会に関する文献調査を進めると同時に、「アイデンティティと土地」の視点からみた祖霊信仰に関するフィールドワーク調査を重点的に行なっていた。エスニシティ研究では、モビリティが飛躍的に向上した現代においても、人々がなお自己のアイデンティティを維持している諸事例の分析を通じて、アイデンティティとは、土地ではなく人に付随するもの、という共通認識が構築されてきた。一方、アイデンティティと土地の連続性は、捨象されがちであった。しかし調査を行ったコン・ムアン村落の祖霊信仰では、「土地に意味を埋め込み、物理的な意味合い以上の社会的な空間を構成し、人々のアイデンティティを喚起するもの」として信仰が機能していた。結果、これまで捨象されることが多かった「アイデンティティと土地」の相関が明らかとなった。 一方、調査村を含むメーテーン郡一帯では、農業から観光業への生業転換が2000年前後から進み、象を利用した観光形態が発達。調査村だけでも10ヶ所以上のエレファント・キャンプ（人間により馴化された象による観光ツアーを提供する施設）が集中し、軽く100頭を超える大量の象が飼われていた。調査村のエレファント・キャンプではコン・ムアンが事業主となり、多様なエスニック集団が協働していた。		

私は調査村での長期滞在を開始後、つねづね「エレファント・キャンプに特化した研究に取り組んだ方が面白いのではないか」と考え、半年ほど経過した後に方向転換をした。

新たな研究では、同じ村において、タイ北部の主観光産業であるエレファント・キャンプを対象とし、「象」をエスニック・マーカーとして位置づけたうえで、エスニック集団間との相互関係からコン・ムアンのエスニシティの位相を明らかにする、という手法を取った。タイの地域的な文脈を踏まえると、象は、象使いであるカレン（山地諸集団の一つ）、タイ・ヤイ（タイ系平地諸集団の一つ）、イサーン（東北タイ集団）など、特定のエスニック集団と密接に語られてきた。彼らにとっての象は、日常生活に織り込まれてきた存在であり、現在では象使いとしてエレファント・キャンプへ参入することが、貴重な生計手段となっている。象自身もまた、出自背景に応じて理解できる言語が異なるとされている。調査村のエレファント・キャンプでは、村落に元々住んでいるコン・ムアンや、象使いであるイサーン、タイ・ヤイ、他にも周辺集落に住むアカ（山地諸集団の一つ）やラフ（山地諸集団の一つ）など、多様な集団が近隣から国境地帯に至るまで広範な地域から集まり、協働している。象を介在したエスニック集団間のコミュニケーションから、コン・ムアンの共同性を同定することを目的とし、研究を進めた。具体的には以下のような調査項目を計画し、実施した。

#### ・象使いと象とのつながりに関する調査

-各個体象の基本情報とライフヒストリーを収集。年齢、名前、性別、入手経緯（購入／交換／譲渡／借入）と入手時の年齢、身体的特徴、性格、来歴、調教時の使用言語、理解可能な言語の種類など。

-象使いの基本情報とライフヒストリーを収集。名前、年齢、性別、出身、象使いになった動機、職歴、M村に移住した理由、業務経験年数、技能継承と師弟関係の結び方（どこで／誰から）など。

-象使いによる、声、身体動作、鉤棒、鎖を介した調教実践について、規範と形態を精査。加えて、給餌、散歩、沐浴といった日常的な場面を通じた象使いと象との関わり方について、細かく把握する。

#### ・象を媒介したエスニシティの多配列性の同定

-「人間と象」というパースペクティブから、他のエスニック集団の存在を内に取り込んだかたちで輪郭を表すコン・ムアンの共同性を精査。各エレファント・キャンプの従業員構成をみると、コン・ムアンが事業主となり、そのシンセキが経理、ツアー運営管理などの重要ポストを担う。カレン、イサーン、タイ・ヤイの三集団が主に象使いとして参与し、他の山地諸集団（ラフ、アカなど）および一般の村落住民（コン・ムアン）は単純労働に従事する。ここには、エスニシティに応じた一定程度の観念的な棲み分けがみられる。よってエレファント・キャンプにおける、象を介在したエスニック集団ごと／エスニック集団間の日常的な場面について、参与観察調査を通じてその形態を把握する。

#### ・動物愛護思想に関する象使い／その他の従業員／ゲストの齟齬と葛藤の分析

-近年、海外動物愛護 NGO による抗議活動が活性化した結果、鉤棒や鎖の調教道具を一切使用しない、「象と一緒に散歩し、給餌と沐浴を行う」ツアーが主流になる。しかし実際には、調教道具を介した象使いと象との日常的交流があり、そこでラ・ポール関係が構築されているからこそ、ツアー中は声かけのみで命令を聞くのが実態である。動物愛護思想に関する三者（象使い、その他の従業員、ゲスト）の齟齬や葛藤の位相について、参与観察調査を通じて把握する。

ここでは研究項目の「動物愛護思想に関する象使い／その他の従業員／ゲストの齟齬と葛藤の分析」について調査成果の一部を記したい。タイでは現在、「象の保護」を主題化したエコツーリズム型のエレファント・キャンプが主流となりつつある。ここでは訪れるゲストに対し、昔の象は劣悪な労働環境に身を置かれていたことや、現在は自然に恵まれたエレファントキャンプで穏やかに暮らしていることが強調される。鉤棒や鎖などを使用した象に対する調教行為は、ネガティブなイメージで語られる。しかし実際には、鉤棒や鎖といった道具を介しない象の飼育には大きな危険が伴う。調査を通じて出会った象使いや事業主のなかには、「言うことを聞かない時や悪いことをした時には、お仕置きをする必要がある」という者もいる。このように何を以て「象の保護」とするのか、象使いとゲストの間、加えて村落内のエレファント・キャンプ間でも意見が対立しているということが見えてきた。この対立構造は、タイにおける伝統的な人間と象との付き合い方と、欧米発の動物愛護思想による「象の保護」の間に深い溝があることを意味する。エレファント・キャンプに訪れる観光客の大半は、欧米諸国から来る。欧米諸国では、動物愛護団体や観光協会を始めとし、「鉤棒や鎖といった矯正器具によって象へ身体的な制御を加えたり、象の背中にまたがったり、象に対して何らかの訓練を課すことは、例外なく動物虐待に当たる。こうしたツアーを提供する観光施設はボイコットするのが妥当」という方向へ向かい始めている。例えば実際にイギリス最大手の旅行業協会 ABTA(The Association of British Tourism Agency)は 2019 年 12 月、象との直接的な交流を提供するエレファント・キャンプを避ける主旨の観光ガイドラインを発している。多くのエレファント・キャンプがこの問題について、どう折り合いをつけるのか模索中であることが明らかとなった。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

鮮明に覚えている場面がある。フィールドワークのため、調査村での長期滞在をはじめた日のことだ。「この村について学ぶため、日本からシュンスケ君がやってきました」と町内放送で紹介された。そして夜には、村のなかで葬式があった。タイの田舎における葬式は村人総出で行うもので、街に出ている村人も参列のため里帰りする。村の皆が顔を合わせる、ある種の社交場としての側面を持つ。村人からすると、私は正体不明で目的不明の怪しい日本人の若者だ。葬式の場では私を訝しむ者もいれば、興味津々で話しかけて来る者もいた。老若男女問わず、概して皆が私に興味を示していた。そしてタイの田舎の葬式では、夜通し行われる賭博がつきものだ。文献でしか読んだことがなかった光景を目の当たりにし、私は興奮した。しかし緊張や疲れもあり、遺体を納めた棺のそばで賭博を観察しながら、寝落ちした。次の日には「葬式で賭博を見たいがために夜遅くまで付き合い、最後にはその場で朝まで寝た男」として村全体の笑い種となった。村落滞在初期のように、一挙手一投足が注目され、細かな言動がうわさの種になるような環境に身を置くことは、今後の人生でおそらくないだろう。

調査村ではホームステイを選択し、とある村人一家にお世話になった。この家には当時高校生だった1人娘がいた。長期滞在を開始して1年ほど経ったころ、ホストファミリーのお母さんとおばあちゃんに「娘をもらってくれないか」と半ば本気の相談をされた。丁重に断ったが「娘を嫁にもらってほしい」と思ってくれるぐらい、私を受け入れてくれていることを実感し、嬉しい気持ちになった。好意的に協力してくれたすべての人々に感謝したい。

私は25歳の年に調査留学を開始したが、20代後半に差し掛かるにつれ元々病弱だった身体に問題が多発した。先天性のアトピー性皮膚炎の著しい悪化、過敏性腸症候群、遺伝による脂質異常症の発症、高コレステロール治療剤投与後の腎臓疲労による複数回入院など。意識混濁になるほどの乳糖不耐症と食中毒を発症し、緊急入院したこともあった。調査が上手くいくかどうか以前に「生きるか死ぬか」という問題に長らく直面していた。周囲に多大な心配をかけたが今のところ症状は落ち着き、比較的健康に過ごせている。毎日生きていることが当たり前ではないことに感謝し、息の長い研究生活を続けたい。

## 今後の社会貢献

第一に、フィールドワークで得られた成果を博士論文として早急にまとめたい。投稿論文や学会・研究会発表による積極的な学術的成果の開示もこれに含まれる。第二に、現地への還元方法として博士論文が完成した暁には、タイ語への翻訳・書籍出版を行いたい。これにより、私が調査村でどういった日常を過ごし、何を考え、何に感動していたのか、現地の人々は知ることができるだろう。第三に、現金な話だが調査村に「カネ」を引っ張ってこられる仕組みづくりに協力したい。調査を通じて「カネが物言う」状況に幾度も直面した。それは新型コロナウイルス感染症が蔓延した2020年以降、顕著に現れた。観光客の往来が途絶え、調査村の人々の収入は激減した。顔を合わせるたびに「カネがない」と人々は言い、エレファント・キャンプ事業主のなかには家財や土地を切り売りする者もいた。従業員と象の食い扶持を確保するためである。私には、こうした状況を変えうるだけのカネはなかった。しかし万一にも、また同じような状況が起こった時には対応しうる準備を、現地の人々と協力して作っておきたい。例えば日本人観光客が、調査村のエレファント・キャンプへアクセスできるような観光ポータルサイトの構築や、「象のエサ代を賄うクラウドファンディング」といった仕組みづくりである。

写真1：村の葬式での一幕



写真2：昼食をとるホストファミリーのおばあちゃん



写真3：エレファント・キャンプでのツアーの一場面

